

ロンブ・カトー著「わたしの外国語学習法」ちくま学芸文庫、筑摩書房 2000年3月8日刊を読む

わたしは自分が外国語の世界を放浪することによって得たものを 10 の教訓、あるいはアドバイスにまとめてみました。ひげらかしやお遊びでなしに、本格的に、外国語を身につけようと考えている人たちのためのものです。

1. 外国語は毎日学習すること。もしまったく時間がないというなら、最低 10 分はやること。特に朝学習するのが良い。
2. 学習意欲が余りにも早く減退するような場合は、自分を《鞭打っ》たりしないこと、だからといって、学習は捨てぬこと。別の形を考えるのです。本をひとまず置いて、ラジオを聴くとか、教科書の練習問題を止めて、辞書をパラパラとめくってみるとか。
3. 何ものも隔離された形で、つまり文^{コンテキスト}脈から引き離して覚え込まないこと。
4. 多くの場合には最大限利用出来る(成句)すべてを順不同で書き出して覚えてしまうこと。
5. 可能な限りあらゆる物事を頭の中で訳してみる。目の前にちらついた広告文とか、ポスターの見出しとか、たまたま耳に入ってきた他人の会話とか。これはいつだって、頭休めになります。疲れた顔にでさえ。
6. しっかりと覚え込む価値のあるのは、教師によって正しく直されたものだけです。まだ直されていない、自分の練習問題の答えを読み返さないこと。幾度も読み返した場合、不覚にもそこに有り得るすべての誤りとともに、その文章は暗記されてしまうのです。もし、ひとりで学習している場合は、あらかじめ正しいとわかっているものだけを覚え込むこと。
7. 成句や熟語的表現は、1～3人称、単数で書き出し、覚えること。たとえば、《I am only pulling your leg》(わたし、あなたのこと、からかっているだけよ)、あるいは《Il m'a posé un lapin》(彼は約束のデートにやって来なかった)。
8. 外国語は、四方八方から同時に襲撃すべき砦であること。新聞を読むことによって、ラジオを聴くことによって、吹き替えなしの映画を見、外国語での講義を聞きに行き、教科書を学習し、その外国語を母国語とする人たちと文通したり、出会って会話することによって。
9. しゃべるのを恐れぬこと。誤りを犯すことを恐れず、それを直してくれるように頼むこと、そして、実際に誤りを指摘されたら、がっかりしたり、いじけたりしないこと。
10. どんなことがあっても自分は目標を達成出来るのだ、自分は強力な意志力と、類い稀有^{まれ}なる

語学的才能を持ち合わせているのだと、固く確信すること。そんなことは有り得ないと思うですって？それも正しいでしょう。それなら、ただ自分は、たかが外国語のようなものを身につけるには、十分に賢い人間だと考えることです。そして、教材が、やはり、どうも抵抗があって呑み込めず、意気そがれてしまうような時は、教科書をくさすこと。完全な教科書など有り得ませんから。それでもダメなら、その外国語をけなせばいいのです。だいたい、どんな国語も難しいものなのです。特に母国語は。そうすれば、何とか前に進むものです。

P211 ~ 213

[コメント]

ハンガリーの大学で物理と化学を専攻した後、生活のために英語を独自の方法で学習し、5か国語の同時通訳者、10か国語の通訳者、16か国語の翻訳者となり、90歳を過ぎても新しい言語の習得に挑戦する著者の外国語学習法。私の大好きな米原万里さんの翻訳も素晴らしい。是非、御一読を。

- 2012年5月4日林 明夫記 -